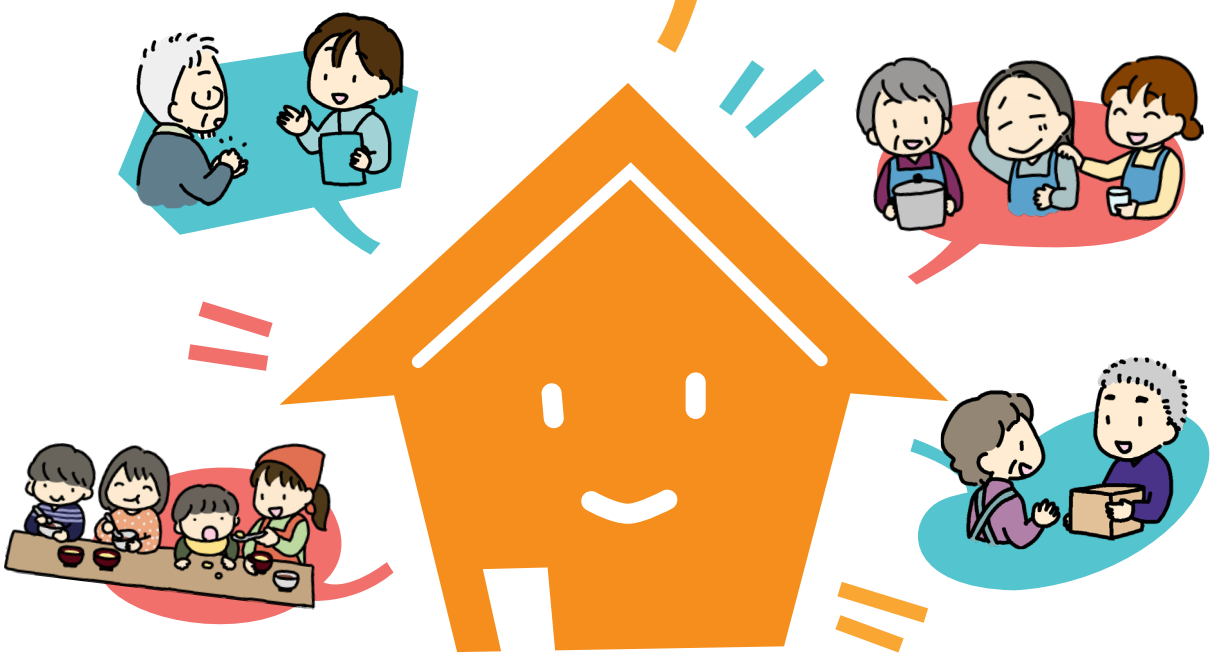
こども食堂運営者に

行政・学校・福祉専門職との連携について聞いてみた！

こども食堂と子どもを見守る“つながり”のはなし

こども食堂インタビューブック



編集・発行 認定NPO法人 全国こども食堂支援センター むすびえ

はじめに

こども食堂でのエピソードを伺っていると、あたたかな寄り添いのエピソードを耳にする一方で、時には深刻なお話を伺うこともあります。例えば、子どもたちとの関わりの中で、実は家庭が経済的に困窮していて、行政のサポートが必要なケースもあります。月に一度のこども食堂の日以外にも、居場所を必要とする子どももいます。こども食堂の運営者へのアンケート調査によると、こども食堂での困りごとに「気になる親子への個別支援」を挙げる人が37.2%もいることが示されています（2023年6月むすびえ実施：こども食堂の現状＆困りごとアンケートVol.8より）。さらに、これらの支援を実現するために地域と連携したいと考えている人たちの中には、「地域住民・学校・教育委員会・行政の協力が得られない」と感じる人も多数存在します。むすびえも、政府や自治体と連携してこども食堂の価値を伝えようと努めていますが、力が及ばない部分も多く、全国的にこども食堂と行政の間で連携態勢が整っているとは言えない状況です。

こども食堂は地域社会では比較的新しい取り組みであり、制度や法的な枠組みもありませんが、社会に必要とされ2023年時点で9,132箇所もの場所で展開されています。子どもたちを支える活動には、行政や学校、福祉専門職、また地域の方々との連携も大切な要素となりますが、地域の中で新しく生まれたこども食堂が、各所とつながり協力関係を築くにあたり、最初は苦労されたという運営者の方も多いのではないでしょうか。一方で、こども食堂運営者の中には、「行政と連携して子どもたちを支えています」「学校とも密にやりとりしています」「地域住民のいろんな力を出し合ってこども食堂を運営しています」という好事例もあります。この方たちが、地域とつながっていった経緯にはどんなものがあるのだろうか？という疑問が浮かびました。それが、本書に掲載するインタビュー調査のきっかけです。

調査を始める前、私たちも「つながりを作るためのテクニック」のようなものがあるのではないかと思っていました。しかし運営者の方々からの話を聞くうちに、それよりもむしろ、皆さんの「あり方」が大きく関係しているのではないかと考えるようになりました。こうした「あり方」をできるだけ忠実に伝えるために、インタビュー形式で皆さんの声を届けたいと思い、この冊子を作成することにしました。

本書はハウツー本やガイドラインのような、「このようにやれば上手くいく！」というようなノウハウを提示するものではありません。3人の運営者の体験から、「子どもを見守る地域づくりのためのヒント」を一緒に探っていきましょう。

最後になりましたが、この冊子の作成にあたってご協力をいただいたこども食堂の皆さま、関係者の皆さま、そしてこの冊子を手に取ってくださった全ての方々に感謝を申し上げます。

認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ
プロジェクトリーダー　**山角 直史**
2024年3月

目次
Contents

2　はじめに
3　目次
4　この冊子について
5　作成メンバー紹介

こども食堂運営者インタビュー

8　事例 1　**上手くいかない相手こそ、安心できるコミュニケーションを**
14　コラム 1　**「エピソードを通じてこども食堂を感じる」**
広島県尾道市うらしまみんなの食堂の物語
16　事例 2　**つながり作りもPTAも、どうせやるなら面白く**
22　コラム 2　**「こども食堂の可能性を知ったとき」**
宮城県色麻町ふれあい食堂の物語
24　事例 3　**自分から地域に巻き込まれていく**

30　3人のお話から感じたこと
32　まとめ
34　おわりに
35　ご協力いただいたこども食堂の皆さまへ

この冊子について

こども食堂運営者インタビュー

3人のこども食堂運営者の方々への実際のインタビューをもとに、こども食堂が地域とつながるストーリーを掲載しました。3人それぞれの実践、試行錯誤、創意工夫が、そのまま冊子を読まれている皆さんの活動に応用できるとは限りません。十人十色、地域性も人も違う。それでも、3人の話から、何か受け取れるヒントがあるのではないかと思い、この冊子を作成しました。ご参考になれば嬉しいです。

3人の方々は実際にこども食堂を運営されていますが、地域や個人が特定される部分には若干の脚色を加え、匿名で掲載しています。また各事例には、本書制作にあたってアドバイザーを務めた金城学院大学講師の岩垣穂大氏に解説のコメントをいただきました。

3人のお話から感じたこと

3人の運営者のお話を伺い、私たち作成メンバーが感じたことをまとめています。あくまで作成メンバーが主観的に感じたことを掲載しておりますので、拙い表現もあると思いますがご笑覧いただければ幸いです。

コラム

むすびえでは、つながりづくりのきっかけとして「MSC (Most Significant Change ＝もっともすごい変化)」という手法を使ったワークショップを行っています。このツールを通じて、地域でつながりが広がった瞬間に立ち会うことがありましたので、コラムにてご紹介します。

MSCを用いたワークショップについては、こちらのページをご参照ください。
ご関心のある方は、ぜひ取り組んでみてください。

https://ks10th.musubie.org/zenkoku ▶

アンケート

冊子全体をご覧いただき、お読みになった感想をアンケートにてお寄せください。お寄せいただいた貴重なご意見は、今後の事業などに活用させていただきます。アンケートは裏表紙のQRコードまたはリンクからご回答をよろしくお願いします。

メンバー紹介

山角 直史
（プロジェクトリーダー）

こども食堂のつながりを作る力が何なのか、この冊子作りを通じて少し感じることができました。ぜひ一緒に感じていただけると嬉しいです。

六鹿 篤美
（プロジェクトサブリーダー）

こども食堂での“ちょっと気になる”の気付きから、地域の中で「この子のために何ができるか」でつながる、どこまでもあたたかいこども食堂のみなさんが大好きです。

松原 祥
（プロジェクトメンバー）

貴重なお時間をいただいたインタビューの内容を、たったの6ページずつにまとめるのは大変心苦しかったですが、本冊子がお三方それぞれのお人柄が伝わるものとなっていることを願います。

山縣 郁子
（プロジェクトメンバー）

地域みんなで子どもたちを見守る！そのための地域のつながり方がとても素敵です。

山村 怜二
（プロジェクトメンバー）

この調査によって浮かび上がった多様なつながりを皆さまにご紹介できたらと思います。

岩垣 穂大
（プロジェクトアドバイザー）

金城学院大学人間科学部コミュニティ福祉学科 講師（社会福祉士／精神保健福祉士）。
2016年～2020年まで所沢市社会福祉協議会にてコミュニティソーシャルワーカー、生活困窮者自立支援窓口相談員、地域包括支援センター相談員として勤務。現在は、地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインについて研究している。本冊子の各インタビューへのコメント、「まとめ」の執筆を担当。

メモ

こども食堂 運営者インタビュー

こども食堂を通じて地域とつながった
3人のストーリー

事例 1

上手くいかない相手こそ、安心　できるコミュニケーションを

CASE 1

インタビューした方

マチコさん

マチコさんはこども食堂を始めて5年目です。気になる子どもや家庭を、地域の支援機関や行政とも役割分担をして見守っています。もっとも、初めから上手く連携がとれたわけではありません。マチコさんが壁にぶつかりながらも、地域とつながってきた経験や、そこから学び大切にしている想いに、「地域で地域の子どもを見守る連携」のヒントがあるかもしれません。

今日はよろしくお願いします！自己紹介をお願いできますか？

私は、県の福祉職として、主に児童の部署で働きながら、こども食堂を運営しています。不登校の子のための塾でのアルバイトや、教員の経験も経て、県庁に入職、児童相談所で児童福祉司、一時保護所や児童自立支援施設でも働きました。

子どもに関わるいろいろな場所で働かれていたのですね。

そのつながりもあって、うちのこども食堂には施設を卒業した子たちが来ているし、さまざまな事情・困難を抱えているご家庭も積極的に受け入れています。もっとも、「この人はこういう事情があります」というのは、ボランティアでもほんの数人しか知りません。誰が来てもみんな、ありのままのその人をまっすぐ迎えるだけです。

心配な子や困難を抱えるご家庭を、こども食堂含め地域で上手く連携してサポートされているとお聞きしました。
現在はどのような連携態勢で地域の子どもたちを見守っているのですか？

地域の専門職や学校、行政、その他の支援機関などに所属している人が、ボランティアとして参加しているので、何かあったときに役割分担し連携できる態勢が整っています。

「こども食堂を始めよう」って思ったら、地元の生協さんが場所を提供してくれて、そこの組合員さんもボランティアで手伝ってくれました。また、これまでの仕事の関係で出会った人も手伝ってくれることになったり、さらにそのつながりでボランティアの仲間が増えていきました。彼らは“こども食堂のおばちゃん・おじちゃん”でありながら、実は専門職や支援機関の人でもあるのです。

もちろん、それぞれに得意なこと、出来ること出来ないことがあるので、それぞれの守備範囲については、お互いにちゃんと伝えて理解するようにしています。「いざ」が起きたら、こども食堂として動ける範囲も意識したうえで、それぞれの役割分担でタスキをつないでいます。

上手くいかない相手こそ、安心できるコミュニケーションを

行政ともうまく連携されていると聞きました。

今でこそ、そうなんですけど…。初めから上手く関係を作れていたわけではありません。こども食堂の認知度も高くなかったし、行政機関の理解は得られず、子どもの個人情報を渡せないなどの「守秘義務の壁」も大きかったです。行政の動きの遅さやたらい回しにも苛立ってしまって、自分が行政職員だから行政の“弱み”も分かっていたので、そういう所を責め立てるようなことも言ったりしていました。

そうだったのですね！！
行政との連携は、難しいと感じる運営者さんも少なくありません。
マチコさんはどのようにして現在の関係を築いていったのですか？

怒ったって仕方ないかなって気づいたんです。対立しても進まないじゃない。だから、付き合い方・スタンスを見直したんです、自分のね。わたしも行政職員なので、制度や法律の範囲内で出来ること出来ないことがあることは分かっていましたからね。

まずは相手の守備範囲を考えて、動きやすいような情報の伝え方を工夫したりしました。縦割りだなぁとも思うけど、管轄とか担当とか、出来ないことは出来ないからね。担当者が安心して動ける範囲、動きやすさをこちらが理解しにいかないといけない部分があるかなって。

なるほど〜。具体的に自分の中で変えたことや、意識しておこなったことはありますか？

感情や苦労を訴えるのではなく、時系列に整理した事実を伝えること、行政の守備範囲を意識したうえで、どうしたらこの部署のこの担当者に動いてもらえるのかを考えて、何が必要でどうしてほしいかを端的に伝えるようにしました。今も、もどかしい気持ちが無いわけではないですが、ぐっとこらえてね。

あと、「出来ないこと」「やってもらえないこと」を責めるのではなく、小さなことでも「やってくれたこと」へのお礼を伝えるようにしました。

そうそう、SNSで行政職員さんが柔軟に対応してくれたことを発信したりもしましたね。それで、市長が投稿に「いいね」を押してくれたこともありました。

そうやって、行政との関係性が変わっていったんですね。

役所に行くときはいつも「どうも、いつもお世話になってる“こども食堂のマチコ”です。」って、“こども食堂のマチコ”として顔を覚えてもらおうと思って、あえて厚かましく挨拶したりもしていました（笑）。こども食堂として、ボランティアとして、「ここまでなら出来る」というこちらの守備範囲を伝えておいたのもよかったかな。行政の手の届かない所を、こども食堂に頼ってもらえるようにもなりました。

上手くいかない相手こそ、安心できるコミュニケーションを

CASE 1

こちらが戦う姿勢で窓口に行ったら、相手も硬く構えてしまうし、信頼関係も築けない。でも、いざ気になる子どもや家庭を連携プレーで見守ろうと思ったら、普段からの信頼関係が大事。なので、まずはどちらも安心してコミュニケーションをとれることが、関係性構築の第一歩だなと思っています。

なるほど。“安心できるコミュニケーション”、大切ですね。ほかに大事にしていることはありますか？

行政含め関係機関との関係性を築いていく中でも、人との出会いはとても大事にしているんです。

支援機関といっても動くのは“人”で、特に「この人いいな」ってピンと来る人、自分たちで出来ない支援をしてくださる方を見つけたら、躊躇なく、厚かましくお願いするようになりました。そういう声掛けから、こども食堂のボランティアさんになってくれた人もいます。

今はもう、それぞれにみんなスペシャリストで、全体を見ながら、私が何も言わなくても「この部分は自分の役割だな」っていうのをそれぞれが思っていてくれてね。私が不在でもこども食堂は回るっていう信頼感もありますね。メンバーみんなそれぞれにかけがえのない何かの役割を持っている人たちなんです。

関係機関との付き合い方も、その中にいる“人”との関係も大切にして仲間を広げていくことも、大変勉強になりました。今回はお話を聞かせていただき、ありがとうございました！

by こども食堂の仲間

こども食堂の仲間からみた マチコさんのエピソード

マチコはね、その子を何とかしてやりたいと思ったらすごく一生懸命になっちゃうの。寝ない食べないで、本当に倒れるまで頑張っちゃう。それで一人で抱え込みすぎて「誰も助けてくれない！もういい！」ってLINEのグループ飛び出しちゃったりしてね。でもみんなマチコのこと分かってるから、こども食堂も回しながら、戻ってくるの待ってるの。LINEグループって自分では戻れないでしょう。しばらくすると「クールダウン終わったから（戻して）」って連絡くれてね（笑）。

見守ってるというのとは違うかな、信頼してる。マチコにしか出来ない、わたしたちには出来ないことをしてくれる人だから。

このインタビューを読んで

by 岩垣

福祉の専門職として働いている経験から、各関係機関との関わり方について工夫をされていますね。お互いが話しやすい雰囲気を作ったり、異なる意見であっても尊重し合える関係だからこそ、信頼できる支援者の輪となっているのではないでしょうか。

こども食堂を運営する仲間も、マチコさんの長所短所を理解して接しておられ、強い信頼関係で結ばれていますね。それぞれが自分の役割を理解して積極的に行動されることで、誰かに負担がかかりすぎることなく、多様な価値観の中で運営されている点がとても素敵です。

コラム 1

エピソードを通じてこども食堂を　感じる

広島県尾道市
うらしまみんなの食堂の物語

COLUMN 1

広島県尾道市の浦崎地区は、市内の他の地域とは陸続きではなく、海で繋がっている飛び地です。地域活性化を目的にリノベーションされた「UMEhouse うらしま」では、月に１回「うらしまみんなの食堂」を開催しています。

このコラムでは、多くの人が関わるうらしまみんなの食堂の様子と、MSC（Most Significant Change ＝もっともすごい変化）という手法を使ったワークショップである「エピソード大会」の様子をご紹介します。

うらしまみんなの食堂の様子

うらしまみんなの食堂は、毎月１回 第２土曜日の12時半から開催されています。リノベーションされたきれいな室内で、子どもたち15人ほどが集まり、みんなでご飯をいただきます。一歩外に出ると豊かな自然に囲まれ、子どもたちは外でもおおはしゃぎです。

そんな活動を支えているのは、たくさんのボランティアの方々です。近隣の大学から車でボランティアに来てくれて、子どもたちと一緒に遊んだり、美術を学んでいる学生たちがみんなの食堂のためにアートを制作してくれました。また、遠方の高校生たちが射的のお店を出したり、食事のメニューを自分たちで考案してくれたこともあります。

地元のボランティアの方々も、こども食堂の活動のために協力してくださっています。

みんなの食堂でのエピソードを語ろう

そこで、みんなの食堂でのエピソードを語り合うMSC（Most Significant Change＝もっともすごい変化）ワークショップ「こども食堂エピソード大会」を開催しました。様々なボランティアの方々が一堂に集い、みんなの食堂の価値を改めて共有することが目的でした。

大会では、みんなの食堂で出会った子どもたちの成長を感じたエピソードや、「みんなの食堂はお家みたいだね」と言ってくれたエピソードなど、子どもたちもボランティアもみんなの食堂を身近に感じていることを、改めて共有しました。

改めて感じたつながり

エピソード大会を通じて、みんなの食堂が子どもだけでなく大人の出会いの場にもなっていることに気がつきました。民生委員の方や保健推進委員の方など、普段は別々の活動をしている方々が「みんなの食堂がなかったら私たち知り合えなかったよね」と話されていたのが印象的でした。

また、尾道市の行政の方や、社会福祉協議会の方もエピソード大会に参加してくださり、「改めてみんなの食堂と連携していきたいと思った」という声もいただきました。

こうしたイベントは１つのきっかけに過ぎないと思いますが、改めて子どもを見守る活動をされている方々の出会いの場となりました。ここでできたつながりが、子どもたちを見守る連携につながっているのかもしれません。

MSCについてはこちらもご覧ください。

https://ks10th.musubie.org/zenkoku

事例
2

つながり作りもPTAも、どうせ　やるなら面白く

CASE 2

インタビューした方

タカユキさん

タカユキさんは、お寺の住職として勤めながら、ご自身のお寺を会場にしてこども食堂を開催しています。また、近隣の福祉施設や子どもの居場所の職員の方々と一緒に子どもを見守る連絡会を立ち上げています。

タカユキさんはPTA会長になったことが地域に関わるきっかけとなったそうですが、タカユキさんの活動はPTAに留まらず、“面白がる”ことを重要視していました。

今日はよろしくお願いします！自己紹介をお願いできますか？

普段はお寺の住職をしながら、お寺を会場にしてこども食堂をやっています。そもそもはこども食堂を始める前から学習支援の場としてお寺を開放していたんですが、そのときに、妻が子どもたちに簡単な食事を出すと、みんなが大喜びで食べてくれて。そこで、勉強も大事だけど、一緒にご飯を食べたり、日常生活の体験を積んだりする機会をもうちょっと増やしてあげたいなと感じていました。

こども食堂という活動を選んだきっかけは何かあったのですか？

報道でこども食堂を見て、「ちゃんと参加費を頂戴して『食堂』という看板を出せば、『ご飯を恵んであげている』みたいな見え方にならないのがいいな」と思って。そのときにちょうど、社会福祉協議会の地域福祉コーディネーターの方と話す機会があって、「こども食堂やってみたい」っていう話をしてみたら、「ぜひやりましょう！」とその方からお尻をたたかれて、始めることになりました。

こども食堂の運営にはどのような方々が関わっているのでしょうか？

うちの地域には、児童養護施設や母子生活支援施設など児童福祉に関わる施設があって、地域の中でもそういう施設や支援に対する理解もあったし、福祉施設の職員や支援者も他の地域より多いのかもしれません。福祉施設の職員なら地域の子どもや保護者の状況とかもよく分かっているし、こうした地域の方々に声をかけてこども食堂のコアメンバーになってもらっています。私たちの運営するこども食堂では生活が大変な親子に対して直接声をかけつつ、基本的には誰でも参加OKという形で開催しています。

こども食堂の他にも、地域の方々と連携をなさっているそうですが、そのことについても教えてください。

地域の子どもの支援に関わる人たちと、定期的な連絡会をやっています。地域の仲間の中には、子どもの居場所事業の職員や児童館の館長などもいるんですけど、子どもたちは場所によっていろんな姿を見せるので、その様子をみんなで一緒に定期的に話せる場があったらいいね、ということで連絡会が始まりました。連絡会では、それぞれがちょっと気になる子どもについて情報共有をしたり、何かあったときに「どこに・誰に」つなぐとかっていうことも含めて勉強したりしながら、小・中学校の先生とも顔の見える関係性を広めたりもしています。

ただ、オフィシャルな団体として大々的にやっているわけではなく、あくまでも「近所のおっちゃんおばちゃんが勝手に集まって話している」ぐらいの感じでやっています。こども食堂もそうですが、やっぱり素人が集まって勝手にやっているというのがいいところなのかなと思っています。

つながり作りもPTAも、どうせやるなら面白く

地域の方々とはこども食堂をやる前からつながっていたようですが、出会ったきっかけは何だったのでしょうか？

みんな段々と知り合いになった感じですが、一番のきっかけは私が小学校のPTA 会長をやったことですかね。いろんな人との関わりがあると地域でも動きやすいって前々から分かってはいたんだけど、でもお寺の活動ももっとしたいし、周りの人からも「一回地域に関わりだすと、簡単には抜けられなくなるよ」って言われてて。だから以前はあまり踏み込まないように、誘われても断っていました。

でもそんなときに、元から知り合いだった前 PTA 会長に頼まれちゃって。その人は、長いこと子どもの支援やっている人なんですけど、そんな人に「住職、頼むよー」って言われたら、断れないじゃないですか（笑）。

それで、PTA 会長として地域と関わっていったんですね。

そうなんです。PTA 会長として活動していくと、地域の協議会とか委員会とかに何でも全部出るわけですよ。そういうときも、わざわざプライベートな時間を割いて参加しているわけだから、挨拶でどうやって笑いを取ろうかって、常に考えていました（笑）。そうすると自然とみんな顔見知りにもなっていきましたね。もちろん子どもの同級生の保護者同士として知り合って、話してみたらたまたま地域の児童福祉施設の職員さんの奥さんでみたいなこともありました。そうやって、いろんな人とつながっていった感じですかね。

タカユキさんの”面白がる”お人柄があってこそかもしれませんね。PTA 活動を通じて、他にはどんな方々とつなることができましたか？

学校の先生方ともつながれましたね。PTA 会長の活動を通じて知り合っていたので、信頼感があったのか、学校側もすごく丁寧に対応してくれました。

こども食堂と学校との関係で言うと、先生は生徒の個人情報を持っているので、先生たちからあまり顔の見えないような関係性の人が、急に関わりを持とうとしてくると、先生からすると警戒してしまう部分もあるのかなと。そこがこども食堂の難しさかなって。

たまたま私はみんなから知られていたし、連絡会のメンバーも主任児童委員や、保護司などがいるので、学校との距離は近くなりました。あと、そもそもメンバーそれぞれが子どもたちの学校以外での様子を知っていて、みんながお互いに「この人は大丈夫」って分かっている関係性があるから、先生たちも信頼してくれるっていう感じかな。

やはり普段からの関係性が大事なんですね。

その通りだと思います。やっぱり元々関係性がなかったような人が、こども食堂を始めた後に、学校に突然相談しに行くのがどれだけできるかというと、少し大変なんだと思います。そこをどうやって解消するかというと、顔が見える日常的な関わりっていうものをどこまで地域の中で作っていくか、ということだと思います。

つながり作りもPTAも、どうせやるなら面白く

**信頼関係は、一朝一夕では築けないですよね。
地域と関わり始めた時に苦労したことなどはありましたか？**

いやー、色々ありましたよ。私の場合は、PTA 会長になるまでは地域関係の行事もほとんど参加したことがなかったわけですよ。土日は法事で忙しいので、学校の運動会でさえ自分の子どもが出る瞬間だけちょっと見に行くぐらいで。だから、PTAのことも何にも知りませんでした。

そうすると、PTA 会長をやり始めてから、「何でこれやらなきゃいけないのかな」とか「これ何か意味あんのかな」とかって、申し訳ないけど思っちゃうんですよね。それで、会長として「何かちょっとおかしくないかな」って口に出してみると、役員のみんなも「おかしい」って言うんだよね。そうやって気付いちゃったら、変えないと気持ち悪いじゃないですか（笑）。そういう風にちょっとずつやり方を変えていったら、みんなも楽しく活動してくれましたね。どうせやるなら面白くしないと、時間がもったいないし、自分自身がかわいそうなので（笑）。

**確かに、プライベートな時間を使っているのだから、
面白い方が皆さん参加しやすいですよね！**

そうですね。あとは、地域に関わるとなると、あれもこれも手伝ってほしいと言われることは、よくあると思います。そこら辺は、まあ、ギブアンドテイク的なところがありますね。「都合のいいときばっかり来やがって」みたいに思われちゃうと、それはそれで良くないしね。

普段から地域の方々と身近に関われる機会があれば、つながりもつくりやすいのかもしれません。

連携のもとになるような関係性を普段から築いていくことは、重要だけれども難しいですね。こども食堂の他職種との関係形成について、大変示唆のあるお話を聞けました。ありがとうございました！

私のエピソード

by タカユキさん

実は私、今自分が勤めているお寺の生まれじゃないんですよ。なので、お寺とは何か、何をする場所なのかっていうのをずっと考えてきました。それで、報道でも、葬式代が高いとか、戒名料で儲けて税金払わないで、とかって言われるわけですね。もちろん全部がそうではないけど、私も坊さんになる前は思っていました。また、住職になってから「仏教は面白い」って分かったけど、ではその仏教をどう伝えるかとか、お寺として地域のために何ができるか、ということも考えてきました。せっかく場所があるのだから、お寺は地域に開いて、誰もが入りやすくしなきゃいけないと思っています。

こういう考え方って、どんな活動でも多分同じなんですよ。やっぱり違和感とか、「これはちょっと違うかな」って思うこともある。そこに気付いたら、やればいいだけのことなんじゃないかなって思います。

このインタビューを読んで

by 岩垣

お寺のスペースが使えたこと、そして学校や地域活動の中でさまざまな人と出会ったことで、こども食堂の自由で楽しい運営につながっているのかなと感じます。日常生活の中で“顔の見える関係”が築かれていると、いざというときに相談がしやすくなっているのかもしれませんね。

学校とのつながりや地域の人との連絡会においては、個人情報の扱いは難しいと思います。もちろん守秘義務の範囲内ではありますが、“顔の見える信頼関係”があることで、必要な情報の共有もスムーズになっているのではないでしょうか。

コラム 2

こども食堂の可能性を知ったとき

宮城県色麻町 ふれあい食堂の物語

COLUMN 2

宮城県にある色麻町（しかまちょう）という地域では、社会福祉協議会が中心になり、コロナ禍のなかお弁当配布からこども食堂を始めました。しかし、コロナが５類に移行する中で会食形式で開催したいという想いが強くなりました。

このコラムでは、こども食堂について知る研修と、こども食堂について語るワークショップを通して多くの方々の共感を得て、会食形式での開催に踏み切るまでの物語をご紹介します。

「こども食堂」について知る研修

色麻町では、2020年から社会福祉協議会が中心となって「ふれあい食堂」を開催していました。社会福祉協議会の菅原さんは、「みんなが交流できる地域食堂にしたい」との想いで開催されていましたが、コロナの影響であまり交流の時間が取れない状態でした。

そこで、2023年３月にこども食堂について知る研修会を開催し、こども食堂があることで地域にどんな影響があるのかを考えました。また、全国の中山間地域でもこども食堂が広がっている様子をご覧いただきました。

研修会にはこども食堂運営者だけでなく、老人クラブの会長、民生委員、地域おこし協力隊、認知症カフェの方々なども参加してくださり、「こども食堂にこんなにいろんな形や可能性があるなんて知らなかった」「私たちのこんな活動も一緒にできそう！」などの声が上がりました。

「みなさんにとってのこども食堂」を考える場

会食開始を目前にした2023年の８月、MSC（Most Significant Change＝もっともすごい変化）」という手法を使ったワークショップの一環として「みなさんにとってのこども食堂」を語る会を開催しました。調理ボランティアの方からは、得意の料理を振る舞うのが楽しみだというお話を伺いました。また、隣町で子育てをしている方から「私が行ってもいいんですか？」というお声もありましたが、「ぜひ来てください！」との声に安心した様子でした。また老人クラブ会長の方も、「みんなで集まって食べるなら行ってみようか」との声も上がり、会食スタートに向けて、皆さんの想いが重なった瞬間でした。

初めての“集まってみんなで食べる”こども食堂

いよいよ８月末、会食形式でのこども食堂が開催されました。初めてとは思えないほどボランティアさん同士息の合った連携で準備はテキパキ進んでいました。食材は、なんとお肉以外全てご寄付で賄うことができました。地域の中に「子どものために何か力になりたい」と思っている“仲間”がこんなにいらしたことに、皆さんとても励まされたようでした。

子どもに交じって参加されていた作業服のおじさんは、地域の大きな工場の部長さんでした。地域貢献の一環として、こども食堂に寄付することを決めたんだとか！

こども食堂が、地域のつながりを広げていくまさにその現場に立ち会うことができました。

事例 3

自分から地域に巻き込まれて いく

CASE 3

インタビューした方

シンジさん

シンジさんは、地域でこども食堂や学習支援、お弁当配布、遊び広場などの活動に取り組んでいます。シンジさんはお仕事を退職されてから地域活動を始めましたが、今では多くの方々と協力して地域の子どもたちを支えています。仕事一筋だったシンジさんが定年退職後に初めて地域に関わり、丁寧に地域との関係を積み上げていった姿勢の中に、地域連携のヒントが見えてきました。

今日はよろしくお願いします！自己紹介をお願いできますか？

はい、よろしくお願いします。昔の話からすると、大学生の頃にいわゆる「障がい」のある子どもと親子たちと会を立ち上げました。今でもずっと関わり続けています。その頃から、分け隔てをせずに子どもたちと関わろうと思うようになりました。

お仕事は何をされていたんですか？

仕事はずっと教師をしていて、中学校で社会科を教えていました。楽しく学べる授業にしたくて、無駄話に命をかけていました（笑）。

地域に関わり始めたのは退職してからで、それまでは家と職場の往復という生活でした。今は地域で活動を始めて12年経ち、こども食堂を始めてからは6年くらい経ったかなと思います。

こども食堂を始めたきっかけはなんだったのでしょうか？

元々は、こども食堂よりも前に地域の活動に関わり始めました。そのきっかけは、東日本大震災の被災者の方々が地元の学校の校舎で避難生活を送るようになったときに、そこで食事付きの遊び場に参加したことでした。子どもたちが大人に遠慮して縮こまっているのはとんでもないなと思ってね。あと、毎日冷えたお弁当だけがご飯というのも辛そうでした。私が関わったのは6年くらいだと思います。

震災から時間が経つにつれ被災者の方々は引っ越していったけど、地元で子育てに苦労しているお母さんたちと出会いました。両手で子どもたちの手を引いて、さらに背中にもう一人おんぶしているようなお母さんたちです。普通に町中で暮らしていても、やっぱりほっとできる場所を必要としてる人たちがたくさんいるんだっていうことが分かってきたんですよ。

きっかけは、お母さんたちのためだったんですね！

はい。ボランティアの仲間たちで、こども食堂的な活動もやってみたら、ボランティアが子どもに寄り添ってご飯を食べさせてあげて、その間お母さんは子どもから少し目を離して休憩できる、そういう場になっていたんです。だから震災のときの活動を継承する形で、団体を立ち上げました。今では遊び広場や勉強会、こども食堂から講演会まで、いろいろな活動をやっています。

自分から地域に巻き込まれていく

CASE 3

シンジさんのこども食堂には多くの関係機関が関わっていると聞きました。行政機関とつながったきっかけはなんだったんでしょうか？

市の子育て支援の事業の研修会に勉強のために参加したときに、幼稚園や保育園、それから市の子育て相談室など、いろいろな団体が集まっていてね。そのときに顔の見える関係ができました。

市の相談室とは何かと話ができていますが、もちろん個別のケースについて、それぞれの個人情報をペラペラ喋るわけじゃないんですよ。ただ、こういうケースがあるから、参考にしてくださいっていうようなことはいろいろ話を聞いています。私たちは地元でいろんな家庭と具体的につながっていて、行政とお互いに信頼していると思うね。だから行政も話がしやすいんですよ。

行政との連携はハードルが高い印象がありましたが、そんな信頼関係ができているんですね。他にも、学校とはつながっていますか？

学校については、校長先生とは知り合いでよく話しますね。毎日の朝晩、ボランティアで通学の見守りで旗振りをやっているときに、校長は必ずそこに来て挨拶してくれています。学校応援団っていって、何十人という人が地域で旗振っていますよ。普段から話しているから、こども食堂のことも話しやすいっていうのはあります。そんなこともあって、校長も子どもたちのことを心配してるのは聞いていたんだよね。

行政、学校の協力もあるんですね。他にも、地域に協力してくれる人はいますか？

あと、さっき話した市の研修を引き受けている、市内でも歴史のある児童養護施設も、協力してくれています。こども食堂を始めたときに、こっちからお願いしてね。子どもの養育に関していろいろな問題があるだろうけれども、そういう専門的なところを知りたいので教えてくれないかと頼みました。それをきっかけに、いろいろな交流が生まれました。

児童養護施設も協力していたんですね。その後はどんなことがあったのでしょうか？

児童養護施設については、研修で色々教えてもらった後、今度は向こうから「うちの法人でもこども食堂をやりたい」っていう話が来たんですね。じゃあ法人の施設を使って、一緒にやろうと。向こうも若い職員さんは子どもの接し方など勉強になるので、こども食堂をやりたかったという事情もあるみたいでした。たしか3回やりましたね。そういうふうにどんどんつながっていくってことは大事かなと思いますね。

もともと行政の研修に出たのは意図的なことだけど、その後こども食堂を一緒にやろうとなったのは、たまたまです。こども食堂を長くやっていると、必要に駆られていろんな団体と連携することになりますね。

自分から地域に巻き込まれていく

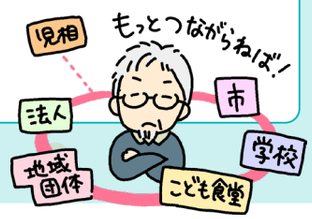
CASE 3

いろいろな地域の関係機関が、こども食堂に携わっているんですね。地域にはこども食堂以外にも子育て支援をしている方々がたくさんいらっしゃいますよね。その方々とは、どんな姿勢で関わっていますか？

とてもリスペクトしています。数年前から思っていたことだけど、今はこども食堂って言うだけでみんなが関心を持ってくれる。だけど昔から子育てを応援するんだっていう団体は地道にずっと活動されているわけでね。ある時期にワーッと注目を浴びたり、また目立たなくなったりする。だけど、後発の我々こども食堂が、いきなり「子育ては我々がやっているんだ」なんて言ったら、それは思い上がりだなと思って。だからこそ、行政の研修会なんかにも積極的に参加して、いろいろな方々と顔見知りになれたことは大きいなと思います。

そんな風にお考えなんですね。既に多くの機関とつながっていると思いますが、今後課題だと思っていることはありますか？

まだ連携が難しい機関もあります。例えば児童相談所は、市ではなく県の管轄だし、権限を持っていることもあって、遠い存在に感じます。児童相談所との関係性は、まだまだこれからだと思っています。こちらも「児童相談所が難しい」と思い過ぎているかもしれないしね。



なるほど・・・。シンジさんほどのご経験があっても、まだこれから改善できる部分があると思っていらっしゃるんですね。今回はお話を聞かせていただき、ありがとうございました！

私のエピソード

by シンジさん

ここ数年で、こども食堂への関心が高まってきたところを、このままにしちゃもったいないと思って、市の生涯教育課と協働でこども食堂の勉強会を開きました。他にも、県のネットワーク団体と一緒に講座をやったり。その甲斐もあってか、市内でこども食堂が新たに2箇所できました。

また昨年市内で、こども食堂とフードパントリーの団体で連絡会を立ち上げました。そこでは、市役所が音頭をとってくれて、予算もつけてくれたんだよね。そこで年に一回研修会をやるようにしているんだけど、遠くから偉い講師に来てもらうんじゃなくて、地元で活動している方々を呼ぶようにしたんだよね。例えば民生委員さんなんかはずっと活躍しているので、やはりその方たちから学ばないといけないなと思っています。

このインタビューを読んで

by 岩垣

地域の活動や勉強会・交流会などのイベントに積極的に参加し、新しく出会った人からも多くの学びを吸収されています。その謙虚で教えを乞う姿勢が、地域の中に自然に溶け込むことにつながっていたように感じます。

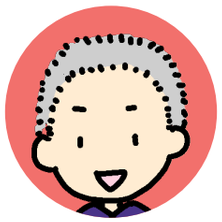
長い時間をかけ、自分から地域に巻き込まれていたことが、より多くの人をつないで巻き込んでいったきっかけになっていたのではないでしょうか。

考察

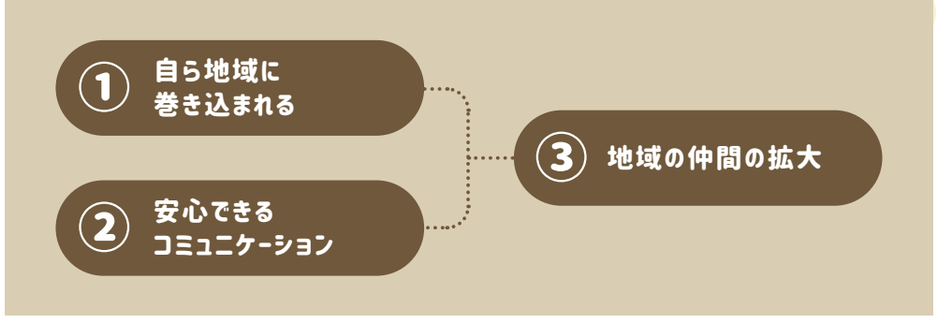
3人のお話から感じたこと

３人のインタビューをご覧いただき、どのように感じられたでしょうか。今回お話を伺ったお三方は、地域での肩書きも、こども食堂のやり方も、関わっている人や地域性などの環境も異なっていたと思います。しかし、地域で行政、学校、福祉専門職や、PTAや民生委員などの活動者を「仲間」として、子どもを見守る態勢を作っていたことは共通していたと思います。そこに共通する「あり方」があるとしたら何なのか？ということを本冊子の作成メンバーで考察しました。

例えば、シンジさんが行政の研修会に参加してつながりができたことは、自らが積極的に巻きこむというよりも、地域に「巻きこまれる」ことで、顔がつながっていったように思います。タカユキさんのPTA会長の取り組みも、まさに地域に巻きこまれていったために、結果的につながりが広がったのだと考えられます。また、マチコさんの行政への関わり方は、相手を責めるのではなく相手のしてくれた行動に対して感謝を伝え、協力関係を築いていました。このような安心できるコミュニケーションの取り方が、連携をスムーズにするきっかけだったように思います。こうした関わり方によって結果的に、地域に子どもを見守る仲間が増え、子どもを見守る地域が形成されていったのではないかと思います。



それを受けて私たちは、地域で子どもを見守る態勢を作るには、このような「あり方」が共通するのではないかと思いました。つながりを作っている方々が、①**「自ら地域に巻き込まれる」**（地域の多彩な場面や関係性に飛び込んだり顔を出したりする）ことで、多様な人々と接点を持つことにつながっています。その際には、②**「安心できるコミュニケーション」**を行い、一見連携が難しそうな人々に対しても丁寧に接することで、敵対的な関係ではなく仲間意識を築くことができるようになる。これにより、③**「地域の仲間の拡大」**につながり、子どもを見守る地域の仲間が増えていく。このようなプロセスが、今回３つの地域で展開されていたのではないかと思います。



言葉にしてみると当たり前のようですが、改めてインタビューを通じて、実際に行動するのはとても難しいことだと感じました。そんな中でも、地域の子どもたちのために、日々つながりを広げようとされている皆さまには尊敬の念に堪えません。

上記の要素はあくまで私たち作成メンバーが感じたものに過ぎません。この冊子を読んでいただき、この３つの要素、またはそれ以外の部分でも、今後の活動に活かせそうなヒントが一つでもあれば、大変嬉しく思います。

まとめ

プロジェクトアドバイザーから

地域でこども食堂を運営していく際、さまざまな関係機関と連携していくことは、子どもたちの成長にとっても重要なことであると思います。しかしながら、十分な信頼関係ができていないうちから一方的に「連携」を意識しすぎると、かえって敬遠されてしまうケースも少なくありません。そのような中、本冊子の3事例には、「連携」に関するヒントが詰まっていたのではないでしょうか。

マチコさんの事例では、行政職員さんの「できること」と「できないこと」を知り、できることの範囲で具体的な協力を依頼されていました。また、挨拶やねぎらいの声掛けなども意識的に行われていました。自分たちがやりたいことを強く主張するのではなく、まずは相手の立場に立って一緒にできることを探してみる。このような姿勢が心地よい人間関係を築き、連携へとつながるヒントになると考えることができます。

タカユキさんの事例では、「地域活動を楽しむこと」が大切であると語っておられます。タカユキさんが取り組まれていた学校のPTA活動は、給料という形で対価が支払われるわけではなく、限られた時間で参加する方が多いはずです。そのため、正しさだけでは活動の継続がなかなかうまくいきません。笑いがあったり、楽しいことを始めたり、感性に触れる部分が活動の中に多くあり、参加者を惹きつけているのではないでしょうか。

シンジさんの事例では、地域で活躍されている方に講師になっていただき研修を行うなど、学び合うことを大切にされていました。地域活動は年齢も職業も経験も異なる人が集まる貴重な機会でもあります。その中で、「こんな面白い事例がある」、「こんな面白いスキルを持った人がいる」といった学び合いの中から、アイデアを掛け合わせていくことでさまざまな人がつながり、さらに活動を有意義なものにすることができると思います。

内閣府人事院が公表している「人口1000人当たりの公的部門における職員数（行政職員など）の国際比較（2020年～2021年）」によると、日本は37.9人となっており、比較対象となっている欧米諸国（アメリカ62.2人、イギリス71.3人、フランス90.0人）に比べ圧倒的に少ないことが分かります。また、OECDが2019年に行った調査によると、日本の小学校の先生の労働時間は1週間で54.4時間であり、世界一長いことが明らかになっています（世界の平均は38.3時間）。これらの数字から、日本では公的機関でも学校においても、大変な環境の中、お仕事をされている現状があると言えます。もちろん、これらの状況を改善していくことは重要な課題であることは言うまでもありません。しかしながら、現状を踏まえたうえで、こども食堂に関わる公的機関や学校の方々と、一緒に連携しながら活動を進めていくこと、そして公的機関や学校がなかなかできない役割をこども食堂が担っていくことが、こどもたちが安心して暮らせるまちづくりにつながる気がしています。

最後になりましたが、本冊子が多くの団体をつなぐきっかけとなり、こども食堂に関わる全ての人の人生が豊かになっていくことを願っています。

プロジェクトアドバイザー　**岩垣 穂大**

2024年3月

おわりに

今日もどこかで開催されている、慌ただしくもにぎやかなこども食堂。その日の運営だけでも忙しい中、運営者の皆さんはこども食堂に来るたくさんの子の中から小さな小さなSOS（時に本人も無意識の）を鋭くキャッチして「あれ？ちょっと気になるな」と思ったら、地域の人として見守り、そっと声をかける。

専門家ではない、支援機関でもない、けれども同じ地域に住む人として「この人になら話してもいいかな」と相談してくれることもある。いざ困ったことが起きたときに、地域の大人の中でこども食堂が選ばれるのは、何カ月何年も「一緒に食べる」「時間を共有する」という積み重ねと、こども食堂に来る子ども・利用者が、こども食堂運営者のあたたかさやその懐の深さを感じているからだと思います。

一方で、こども食堂が懐深い場所であるとはいえ、地域のボランティアとしては対応しきれないこと、限界を感じる場面もあると思います。わたしたちの調査では、特にそのような声も多く聞いてきました。“誰かのために”動けるこども食堂運営者が、それゆえに抱え込んでしまう場面もあると思います。そこで、こども食堂でキャッチした“ちょっと気になる”子を、地域の他の機関（児童館やプレーパーク、学習支援などほかの居場所、学校、行政、支援専門機関など）と連携して、地域で子どもを見守るような態勢ができたら、そんな地域が全国にできたら、誰も取りこぼさない社会も実現できるかもしれません。

この冊子は「こうすれば連携できる」という、画期的なアイディアを提案できるものではありません。そう新しい発見のある内容でもない、よく目にする耳にする”ありふれた”言葉かもしれません。インタビューをさせていただいた３人の皆さんも口をそろえて「特別なことをやっているわけではない」と仰います。その「特別なことではない」姿勢や考え方に、大切なことを教えてもらいました。“ありふれた”ものは、“ありふれる”ほど繰り返されるべき大事な要素や意味があるのだと。

この冊子の発信が、「こども食堂はこうしなければならない」というプレッシャーを与えるものにならないか、こども食堂運営者を傷つけるものにならないか、チームで議論と検討を重ねてきました。何か発信するということは、常にそのような可能性があることにも自覚的でなければならないとも思います。それでも、たくさんの協力を得てこの冊子を発信したいと決断したのは、お話してきたようなこども食堂の可能性を信じているからです。こども食堂に、「こうしなきゃいけない」ことはないけれど、「こうしたい」と思う運営者の皆さんの背中をそっと応援するような存在でありたいと思っています。

最後になりましたが、今回のプロジェクトにご協力いただいたこども食堂の皆さま、また資金面で心強いご支援を頂いた日本財団様、この冊子を手に取ってお読みいただいた皆さまに心から感謝いたします。

プロジェクトサブリーダー　**六鹿 篤美**
2024年3月

ご協力いただいたこども食堂の皆さまへ

本冊子制作のためにインタビューを実施させていただいたこども食堂運営者・スタッフの方々へ、この場を借りて感謝を申し上げます。直接お会いしてのインタビュー調査は、対面だからこそ伝わる気づきをたくさんいただきました。

運営者の方々からお聞きしたお話を本冊子に掲載するにあたり、改変している部分が多々あります。そのうえで皆さまから掲載のお許しをいただき、無事に冊子の発行にまでたどり着くことができました。

またコラム掲載にご協力いただいた２団体の皆様にも感謝申し上げます。お忙しい中、私たちとイベントをご一緒させていただいたのに加えて、冊子への掲載も快諾してくださいました。

本当にありがとうございました。

こども食堂運営者に行政・学校・福祉専門職との連携について聞いてみた！
こども食堂と子どもを見守る"つながり"のはなし
こども食堂インタビューブック　2024年3月20日

発行　認定 NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ
理事長 湯浅誠
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-5
リンクスクエア新宿 16F
公式ウェブサイト：https://musubie.org

デザイン　和田直也／山上めぐみ
イラスト　塩澤亜沙美
プロジェクトメンバー　山角直史／六鹿篤美／松原祥／山縣郁子／山村玲二
プロジェクトアドバイザー　岩垣穂大
協賛（助成）　日本財団

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

©2024 むすびえ All rights reserved.

認定NPO法人 全国こども食堂支援センター
むすびえ

関連コンテンツ

●こども食堂エピソードムービー「ある日のこども食堂」
●パンフレット「こども食堂ってどんなところ？」
●こども食堂エピソードブック「ある日のこども食堂
　～ちょっと気になる子との関わり～」
●行政・学校・福祉専門職のみなさんにこそ読んでほしい！
　「ある日のこども食堂　こども食堂エピソードブック２」

https://musubie.org/pickupproject/grayzone/

アンケートのお願い

最後までお読みいただき、ありがとうございます。
この冊子をお読みになった皆様に、是非ともアンケートのご回答をお願い致します。お読みいただいた方お１人につき１回ずつご回答いただけますと幸いです。いただいた回答は、今後の事業の発展のために活用させていただき、許可なく外部への公表は行いません。

アンケートは上記 QR コード読み取りまたは下記 URL からお願い致します。

https://forms.gle/KBF7PtVmfpJ6sG8CA

この冊子に関するお問い合わせはこちら

Mail：grayzone@musubie.org